

レビュー要求分析・設計・実装試行でわかったこと

安達 賢二

HBA

adachi@hba.co.jp

要旨

2009年からこれまで、SQiP シンポジウムや客先などのさまざまな場面で、「レビューの問題点」を収集してきた。その結果、ソフトウェア開発・保守を中心とした実務において、レビューの問題点が多数存在し、手間がかかる割に効果が実感できないという意見が多いことがわかった。

その打開に向けて、要求仕様書を題材にしたレビューワークショップを構築・提案し、実施した結果、欠陥検出を目的としたレビューにおいて「アドホックレビュー」よりも「レビュー観点設定に基づくレビュー」の方が指摘件数、指摘内容の両面において有効性が高いという結果を得た。

一方で、同一ワークショップに取り組んだ各チームが設定した観点(大項目)とその詳細(具体的な個別確認項目)、および欠陥指摘件数、指摘内容には多くのバラつきがあり、その打開に向けた対策が必要である。

今回は、レビュー観点(大項目)とその詳細(具体的な個別確認項目)のバラつき防止・低減を目指して「レビュー要求分析・設計・実装」を試行し、その効果を確認した。

その結果、以下のことがわかった。

- (1) レビュー観点、確認項目の抜け・漏れ防止への効果が期待できる。
- (2) 併せて、レビュー実施の効率化が期待できる。
 - ・論理的な観点単位にバラバラに確認する必要がなくなる
 - ・確認対象が小さく、確認項目が具体的なので確認と判定が楽にできる
 - ・関連する項目を連携しながら系統だって確認できる
 - ・重複している項目が集約できる
 - ・対象毎に不必要な項目を省くことができる
- (3) テスト要求分析(の多くの部分)とテスト設計の一部を兼ねることができる。
- (4) レビュー対象成果物作成作業(今回の例では要求定義)の一部を兼ねることができる。
 - ・これができると、レビュー時に確認する観点・項目をリスクが高いものに絞り込むことが可能となる
- (5) 一方で、レビュー要求分析～実装まで手間と時間が

かかる。

(5)については、レビュー要求分析～実装までの実践力がつけば多くの部分で打開できると想定される。また、さらに効率化するためには「レビュー観点図」(例:添付スライド 15・16)などの運営基盤となる情報を育てていくなどの対策が必要である。

参考文献

- [1] SS2015 WG6 Position Paper「レビューの会議術からの脱却」電気通信大学 西康晴
- [2] JaSST'16 東京 発表事例「レビュー目的・観点設定の効果と課題」 安達賢二